

このことは、それほどまでに他人の理解をこぼんでいるのである。こぼむものは、なんにもないにもかかわらず、いやなにもないから理解を必要としないのかもしれない。勿論、最初に書いているように、判り易く書き、わかり易く本を作るのが、ささやかながらも私の強い念願であったのです。それが、こうまで軌道をはみだしてしまったのは私の失敗だったのか、私のもつ体質的勝利だったのか、このことの無責任ながら私には良くわかる代物ではありません。私はタダ、ムヤミヤタラと突進し、ムヤミヤタラと友人に関する記事を集めたのです。その膨大な資料の影に友人たちのキワダった個性は消えたのか、表出されたのか、私には、わからないことです。しかし私は友人たちのエネルギーの産物である記事をハサミで切抜きムヤミヤタラとはりつづけたのです。そのハサミの行きつく先が結局はなんにもなかったというキワメで明白な虚なのかも知れません。そうだとすれば、なんと不思議なことでしょう。友人達のエネルギーが積み重なって虚を産む、ト劳に終わったということは、いったいどんなことでしょうか。こう書いたからといって、こう私が考えたということでもありません。一つの出逢いが一つの出逢いを呼ぶ。そして、それは結局、双頭の狼、あるいは蛇なのであって、終りと初めが一緒になって時間が消滅すること、その時、生も死も一線上に並び、犯罪も善行するが、人間臭を離れ、それは一つの石と化してしまう。石には、物質には善も悪もあったものではなく、人間にとって単に有用であるか、無用であるか、関心があるのか、ない白さのかという地平に、すべては除去されてゆく。その二つの頭で語られるもの、その千の眼で表現されるものは、輪廻の切断であり「思い」の断念である筈のもの、いまにして考えれば1987年2月20日からの事件は、あったもの、なかったもの、想い出されるもの、憎いもの、嬉しいもの、それ等をおしなべて同一の地平へ並べようとしたことであつたのだろうか。人生とは生れ死ぬことの実感であり行動であるにもかかわらず、遺伝因子の存続という、我身であつて我身でないものへと、もどかしくつづいてゆく果てしない回転木馬の同心円のたわむれの運命に似ていないこともない。されど私は、二頭の頭をもって、始めと終りとを同等としようとしている。これを否定して歴史は成立しない。今、私が企てている思いの中には確かに歴史はない。いや、はいる余裕がないといった方が適切なのかもしれない。終りがなく、始めがないと言っても、すべてには初めと終りがある。その初めと終りを根本的解消へもつていこうとしているのである。そして、いま、この本の特長とはと問われれば、読んでも、すぐ判るというものではなく、読み手が己れ自身に照らし、もう一度翻訳してみて、はじめて理解される面倒臭い無用の長物なのである。